

私とヴァイオリン

「私とヴァイオリン」というテーマで書こうとすると、どうも気恥かしさの方が先に立つ。肝腎のヴァイオリンの方は、こんなことではいけない、いつも思いながら多忙にまぎれて弾く機会が少なくなってしまうているし、私のヴァイオリン技術は、最大限に見積ってもメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を我流で弾く程度であって、少しも進歩していない。この頃では書齋で原稿を書くときに、バッハやモーツァルトを、ときには大好きなプロコフィエフをテープで流して聴くのが日課のようになってしまっている。

そんな私のヴァイオリンについて、いつか草柳大蔵氏が鈴木鎮一先生の才能教育を『週刊文春』で紹介された際に言及されたためであろうか、市民大学などで地方講演に行くとき司会者に言及されることがあるので、ますます気恥かしくなってしまう。

私が初めてヴァイオリンを手にしたのは、たしか終戦の翌年、私の小学校四年生のときであった。敗戦の傷跡は、松本のような山岳都市にも及んでいたが、そのような荒廃にもめげず、そこ

にはすでに素晴らしい音楽的創造の芽生えがあった。鈴木鎮一先生が声楽の森民樹先生らと創めた松本音楽院がそれであり、従兄が趣味でヴァイオリンを弾いていたのを羨ましく思っていた小学生の私は、両親にせがんで、雪の晴れあがった或る日、母に連れられ、鈴木先生の門下に入ったのである。

鈴木先生の才能教育が、わが国ではしばしば「天才教育」と誤解されることはあっても、人間の可能性開発のためのいかにオリジナルな教育であるかについては、私がここで言及するまでもなく、先日亡くなったチェロの巨匠パブロ・カザルスをはじめ世界の音楽家がそれに驚嘆しており、子供たちの大合奏を聴いた者なら誰もが胸を打たれるであろう。今では欧米各国からの留学生がヴァイオリンを手にして歩いている姿が、松本の街角で見かけられる一般的光景にもなっている。

鈴木鎮一先生が間もなく御病氣になられてからしばらくのあいだ、私は先生の愛弟子の一人、まだ二十歳前後で日本人離れた体軀と美貌の山本恵子先生に教えていただいた。すでに昭和十五年の毎日音楽コンクールで優勝した山本先生は、戦後の混乱のゆえであったろう、浅間温泉を襲った集団チフスで夭折されたが、健在であれば巖本真理さんや辻久子さんと並んで活躍されているはずである。

鈴木先生の最大のお弟子である豊田耕児氏が、わが国を代表するばかりか世界を代表する演奏家であることは周知のとおりであるが、私より数歳年長の彼がレッスンを受けているときの真摯な姿には、その音楽の豊かさとともに、荘厳な雰囲気さえ漂っていた。彼が後年、アルテュー



文革渦中で紅衛兵と合奏／1966年秋、上海にて

ル グリュミオーを師に選んだと聞いて、私はやはり豊田氏ならばこそ、と思ったものである。そんな彼を、私たちは「耕ちゃん、耕ちゃん」と呼んで親しんでいたが、浜松の戦災で両親を失い、鈴木先生の一族として育てられた「耕ちゃん」は、よく私の家にも来て話したり、野球をして遊んだりもした。ときには代稽古してもらい、バッハの律動の厳しさを大柳町の鈴木先生宅の土蔵の二階で手をとって教えてくれたのも「耕ちゃん」である。「耕ちゃん」には、東京の梅沢楽器店からドイツ製の弓を選んで買ってきてもらったこともあるが、今も私はその弓を大切に使っている。

その頃、松本へは、小林健次氏もときどきレッスンに来ていた。いつか冬の寒い日、ヒマラヤ杉で蔽われた信大（旧制松本高校）の講堂で鈴木先生が燕尾服姿の正装でオーケストラを指揮し、豊田耕児氏が独奏したときのモーツァルトの協奏曲第五番も私の耳元にその音が残っている。

いずれも、もう二十年以上も前のことであり、私はこの間、豊田氏とついに会う機会を失しているが、当時、私より年少の生徒たちのなかには、最近、帰朝してますます好評の志田とみ子さんやベルリン・ラジオ交響楽団の山田絃子さんがいた。私はそのような俊英のなかで出来ない生徒であり、家業の不幸もあって、高校生の頃からしばらくレッスンをやめてしまったが、そんな私でも、大学生の頃は、充足したばかりの私の大学のオーケストラにコンサートマスターとして招かれたり、大学の文化祭では中野公会堂でモーツァルトのロンド（KV250）やヴェニアフスキーの譚詩などを独奏した。

たまたま学生自治会の委員長だったので、聴衆のあいだから、当時の学生運動にからめて「勤

「評反対！」と野次が飛んだのには閉口してしまった。大学院時代は、学資のためもあって、私自身で「霞ヶ丘ヴァイオリン教室」を主宰し、子供たちを教えたが、間もなく中国研究の方に本腰を入れなければならなくなってきたので、お茶の水の日仏会館で子供たちの発表会をやって教室を閉じた。

最近の想い出の一つは、あの文化大革命の激動期に中国を訪れたときのことである。上海の工業展覧会で中国製ヴァイオリンが展示してあったので、許可を求めて弾いてみたら、なかなか良い音がする。女子紅衛兵の事務員にピアノが弾ける人がいたので、彼女の伴奏で毛沢東讃歌の「東方紅」を即興で弾いたところ、黒山の紅衛兵から大きな拍手を浴びた。

一九六九年から七一年まで外務省特別研究員として香港に留学していたときには、シティーホールで小室内楽を演奏した。音楽に飢えている香港なのであろう、翌日の『ホンコン・スター』紙に写真入りで記事が出たので、またまた気恥かしくなってしまった。どうも、「私とヴァイオリン」は、気恥かしさの連続である。

清水幾太郎氏が最近の『朝日新聞』にテレビの「題名のない音楽会」を愛好されていることを書いておられた。音楽には全くの素人だと自称される清水先生は、昨年末の忘年会に是非私のヴァイオリンを求められたのだが、やはり気恥かしさのあまりおことわりしてしまった。だが、「私とヴァイオリン」なんて書いてしまった以上、いつかは弾かねばならないと覚悟している。

——『文藝春秋』一九七四・三〈巻頭随筆〉

松本音楽院と才能教育

ここ数年、中国をめぐる内外の動きが大きな展開を示したためか、夏休みという私にとってのささやかな「特権」も十分に享受したためしかなかったが、今年久しぶりに信州の夏を満喫することができた。

子供たちを連れて、松本の私の山荘の眼前の弘法山から生妻の池とその背後の山々をヤブを分けて歩いたりしたけれど、最近、前方後方墳が発見されて話題を呼んだ弘法山は、町中に育った私が幼時に近所の子供たちと「冒険」をしに行ったところであり、国民学校（小学校）三年生のときに終戦を迎えた私たちは、たしか一、二年生の頃、食糧のためのアカザの葉やオオバコを採りに登った山でもある。そんな想い出に彩られた松本の夏は、私にとってかけがえのないものだが、東京に戻る日はすぐにやってきた。

私のように国際関係論を講義したり、中国研究、それも現代中国研究に携わっていると、なにかと精神的にわずらわしいことも多い。その……まじつとまじつと、ヴァイオリンを手にし、手あ